

会報



第24号

編集・発行人 支部長 浅子逸男

古書店にて

浅子 逸男

古本屋の店頭で『大漢和辞典』を見かけた。縮刷版十三冊揃いで一万八千円。

なんという値段だ。ほかにも『澁澤龍彦全集』、『澁澤龍彦翻訳全集』がそれぞれ四万円だ。この古本屋は京都でも比較的高い値段をつける店である。

私はろくに収入のない時代から本を買ってきた。それが勉強だと思ったのだけど、このまま無収入に近い時期が長く続くようなら、本を売って生活費にしようという埒もない考えもあったのだ。ところが、そんな考えがいかに甘かったか。

しかし、ひるがえって考えてみよう。勉強のために買ったんだから、勉強が終わるまで手放す必要はない。

そして、さらに、古書価が安いということは本を読む絶好のチャンスなの

だ。いまこそおおいに本を買って勉強すればいい。

私たちは高収入を得たくて研究の道に入ったのだろうか。好きな本を読んで、いかに研究がスリリングであるかに気がついたからではないのか。

本が安い。ネットで「日本の古本屋」を見るがいい。検索したらいちばん安いところから買えるではないか。いまこそ本を買って研究にいそしむときだ。

愚痴をこぼすヒマがあったら、勉強しようではないか。

支部大会案内

二〇一六年度 秋季大会 於・甲南女子大学

一〇月二九日(土) 午後一二時四〇分)

【プログラム】

■開会の辞

甲南女子大学文学部日本語日本文学
科長 信時 哲郎

■自由発表

三島由紀夫『潮騒』論——初江に着目
して——

福田 涼
司馬遼太郎「世に棲む日日」と本当ら
しさ

森 瑠偉
目取真俊『面影と連れて』論——美化
される被害への抗いについて——

栗山 雄佑

■連続企画『《異》なる関西——19
20・30年代を中心として——』第
三回

神戸近代文化研究会「光源としての
『大阪朝日新聞神戸附録』——神戸モ
ダニズムを問い直す——」

趣旨説明・司会

三品理絵・柚谷英紀
発表

・結節点としての労働学校・関西学院
・一九二〇年代半ばの『神戸附録』映
画情報／新聞連載小説の映画化を中
心に／

永井 敦子

・「理想住宅」と「煌ける城」——
九二〇年代・神戸の建築空間をめ
ぐって——

高木 彬
・前衛芸術と郷土芸術——神戸一九二
〇年代文学の後景——

質疑および全体討議

司会 三品理絵・島村健司

島村 健司

■閉会の辞

支部長 浅子 逸男

〔自由発表要旨〕

三島由紀夫『潮騒』論——初江に着目して——

福田 涼

三島由紀夫『潮騒』（昭和二十九年六月）は、戦後を代表する青春恋愛小説の一つとして知られている。「神話的で原初的なもの」（佐藤秀明）として叙述される新治と初江の恋愛譚は、一面「通俗的」でありつつもなお「美的」（同前）なものとして、広く受け容れられてきたと言えよう。

しかし、『潮騒』の語り手が「新治と初江とを対称に扱うのではなく、二人の愛をあくまでも主人公新治に即して形作っている」（梶尾文武）ことは無視できない。語りの焦点が初江の内面に置かれる場面は限られており、彼女の詳しい生い立ちや学歴、更には年齢さえも明らかにされない。このような語りの姿勢からは、初江の稚さを

強調し、彼女の内面をいわばブラックボックス化しようとする語り手の作為が垣間見えるのではないか。

このことを踏まえて、本発表では、これまで考察の対象から除外されがちであった初江に着目して分析することで、一篇が本来備えている奥行が、語り手によって殊更に演出される「神話的」な結構の下で隠蔽・醜化されていることを明らかにする。具体的には、細部の叙述に改めて目を配ることで、『潮騒』という小説が、父Ⅱ家の意志に抵抗する「智恵者」の初江が主体的に伴侶を選択した話として読まれ得るだけの空白を残していることを論証する。

本発表での考察を通して、『潮騒』の新たな読解を提示するとともに、所謂「古典主義」時代における三島の小説作法を再検証する為の端緒を開きたい。

司馬遼太郎「世に棲む日日」と
本当らしさ

森 瑠偉

司馬遼太郎の「世に棲む日日」は、一九六九年二月から一九七〇年一二月まで『週刊朝日』に連載され、前半部は吉田松陰を主人公に、後半部は高杉晋作を主人公に書かれた小説である。

松本健一は、司馬遼太郎の小説について四期に分類している。一九六〇年代末から一九七〇年代を「歴史小説」と分類しており、本発表で取り扱う「世に棲む日日」は「歴史小説」に分類される。「歴史を舞台にしたヒーロー小説」と「歴史小説」とを区分する理由について「歴史を事実において捉える度合いが大きくなっている」ことを松本は挙げており、作品を書く際に用いた典拠の記述がどのように作品に描かれているかを分類の論拠としているのである。しかし、実際に作品をよむ読者は、どれほど典拠や歴史的史

料の記述を意識して読むだろうか。つまり、司馬遼太郎の小説が「歴史小説」として扱われている要素の一つとして、典拠との関係を問うだけでは根本の分類は不十分であり、その叙述自体の持つ本当らしさについて分析を行う必要がある。

そこで本発表では、「世に棲む日日」の前半部の吉田松陰について書かれた部分を取り上げ、作品で行われる歴史の提示方法について分析を行う。「世に棲む日日」においては、典拠の存在は必ずしも明示されない。玖村敏雄による「吉田松陰傳」（『吉田松陰全集第一巻』所収）や斉藤鹿三郎の『吉田松陰正史』の記述を基に作品は書かれているが、その存在は提示されないのである。一方で、吉田松陰自身が残した書簡や日記類については、その記述によって書いたことが記されている。さらに、聞き書きの場合は、その情報源とともに作品内で提示され、「筆者」が行った調査の場合は「筆者」の存在

も作品内で示される。つまり、歴史研究を直接参照しない、新たな調査であるような歴史像を提示していると言える。このような歴史の提示方法を用いて、「世に棲む日日」では歴史研究と立脚点の異なる本当らしさを確保しているのである。

目取真俊『面影と連れて』論—— — 美化される被害への抗いについて——

栗山 雄佑

本発表では、目取真俊『面影と連れて』（一九九九年）より、登場する主人公の女性が作中の周囲の人物に解釈されることへの女性の疑義と諦念を中心に、作中の人物や先行研究が行う主人公の美化について考察を行う。

作品には、集団性暴力を受け殺害された主人公に残された身体の傷跡、死の直前につぶやく「もういいよ」との

言葉が描かれる。この主人公について、池澤夏樹等から主人公を「あれ」と美化し、現在の沖縄の状況と重ね合わせる読解が提起された。しかし、先行論による主人公を沖縄全体の被害に重ね合わせて語ることに疑問が残る。作品は、一九七五年のひめゆりの塔における現天皇夫妻への火炎瓶投擲を背景とする。この場所より、ひめゆりの乙女と主人公の共通点が指摘できる。新川明は、沖縄戦後におけるひめゆりの乙女の可憐さの強調と被害の美化について警鐘を鳴らした。この指摘を踏まえると、主人公を「切なくて苦しい語り」、「幻想的」と語ること、ひめゆりの乙女に対する美化表象と同じ轍を踏むことになるのではない。主人公の「もういいよ」という応答は、自らの意志に反し「沖縄の女性の被害」と解釈されることへの諦念と捉えることが可能ではないだろうか。このように読み替えたとき、作品が沖縄において主人公を含む女性の被害

が作中及び現実にて「あはれ」と美化されることに対する疑念と、抗いが不可能という諦念を主人公に抱かせる暴力性の問題を示す作品であると提示したい。

〔連続企画第三回 趣旨〕

光源としての『大阪朝日新聞神戸附録』——神戸モダニズムを問いなおす——

私たち神戸近代文化研究会は、主にモダニズムという視点からなされてきた海港都市神戸の文化についての考察を、一般市民の生活や芸能や大衆演劇などの存在を踏まえ、より多層的な視点から捉えなおすことを目的として現在活動中である(二〇〇九年活動開始、二〇一五年度から科研費基盤C〔代表者・箕野聡子〕。具体的には、一九二〇年代の『大阪朝日新聞神戸附録』(『大阪朝日新聞神戸版』)の文化記事のPDF化・データベース化を進めており、文学・美術・映画・演劇・芸能・建築・労働運動などのジャンルを立て、文化の背景にあるコンテクストに対して考察を加えている。このような本研究会の動向は日本近代文学会関西支部の連続企画「『異』なる関西

の趣旨とも相通ずると考え、このたび研究会として応募した結果、採択されるに至った。

以下、本研究会のめざしてきたこととともに、これに併せて今回の発題者の立ち位置を記しておく。①新聞を基礎データとすることで、文化人や芸術家個人に集中するのではなく、読者を含めた、時代と地域に根ざした文化の流動する様を捉えること。学校や劇場、あるいは新聞紙上といった大衆の集う場に焦点をあてることで、様々な人的交流の様を浮き上がらせることができる(↓主に柚谷英紀の報告)。②神戸を文化の流動の結節点として捉えることで、全国的な文化の流れに関西を位置づけること。関東大震災によって、関東の文学者・画家・演劇関係者など、さまざまな人材が神戸へ流れ込んだ。彼らの多くは、やがて関東に戻り、神戸の文化が今度は東へ逆流することになる(↓主に島村健司・高木彬の報告)。③「阪神間文化Ⅱモダニズ

ム」という固定した捉え方の枠を取り払うこと。新開地を中心とした劇場や映画館、演芸場などの情報を網羅した「演芸たより」をデータとして活用すること、大衆文化から神戸の文化を捉えなおすことができる（↓主に永井敦子・高木彬の報告）。④メディアの読者への直接的な影響力を計測すること。『神戸附録』は地方版であるが故に、読者に対する働きかけが多く見られた。このような発信が神戸文化の土壌をつくることになった（↓主に永井敦子の報告）。

以上の四点を鍵に神戸文化について発題することで、関西支部の野心的な連続企画『《異》なる関西』に新たな視座を提起できればと考えている。

結節点としての労働学校・関西学院

仙谷 英紀

一九二〇年代の『大阪朝日新聞神戸

附録』を読むと、さまざまな労働組合の動きが詳しく読み取れる。一九二一年の川崎三菱造船所争議以降、総同盟の分裂など、二〇年代は神戸の労働組合運動が混迷を極めた時代であった。

『神戸附録』一九二三年四月一〇日には、「労働学校 神戸聯合会に於て」という見出しが掲げられ、翌年の三月一二日には、「労働者の夜学校 労働文化協会の新事業」という見出しがみえる。前者は総同盟による労働学校の告知であり、講師として山名義鶴、松澤兼人、新明正道、村島帰之などの名前が挙がっている。後者の労働学校は久留弘三の労働文化協会を経営母体としたもので、河上丈太郎や井上増吉、村島帰之等が講師として名を連ねた。両労働学校の講師には関西学院と関係の深い人物が多くいることに注目すべきであろう。本発表では、労働学校および関西学院と神戸の文化活動との接点に光を当てたい。

一九二〇年代半ばの『神戸附録』映画情報／新聞連載小説の映画化を中心に／

永井 敦子

一九二〇年代の神戸の映画館は新開地が中心となり、洋画専門の朝日館とキネマ倶楽部、錦座、菊水館など様々な映画館で賑わいを見せていた。各映画館の情報は、『神戸附録』の「演芸たより」欄で確認することが出来、他に「映画界」「映画雑誌」欄などもあり、映画鑑賞へと読者を誘う紙面になっている。その中でも特に、大阪朝日新聞と映画の関わりを強調しているのが、本紙連載小説の映画化に関する記事である。上映館の広告を見ると、本紙連載であることが明記され、さらに紹介記事では、新聞購読者に優待券を出すサービスが強調されている。中でも、一九二五年上映の「大地は微笑む」（日活・松竹・東亜キネマ競作）や「人間」（日活）は、一九二三年の大阪朝日新聞懸賞に当選、推薦となり

連載されたことから、繰り返し紙面に
取り上げられ、広告や宣伝にも更なる
工夫が施された。『神戸附録』と映画
館が一体となって、読者に映画鑑賞を
呼び掛ける様相を跡付けたい。

「理想住宅」と「煌ける城」——
一九二〇年代・神戸の建築空間
をめぐって——

高木 彬

一九二〇年代に内務省が主導したプ
ラグマティックな都市政策（耐火・衛
生）は、神戸という土地へ馴化する過
程で、ある「理想」を胚胎していく。
その様相を『大阪朝日新聞神戸附録』
紙上で追いたい。たとえば、御影に設
計事務所を構えた西村伊作や、阪神急
行電鉄の沿線を宅地開発した小林一三
は、阪神間の富裕層をクライアントと
することで「理想住宅」を実現した。
郊外で培養されたプライベートな「理
想」。それはやがて神戸の都心部にお

いて縮小再生産され、全国の住宅改良
運動や田園都市開発のモデルとして散
布される。このように、都市の工学的
基盤はイメージ形成のプラットフォーム
となる一方で、そのイメージによつ
てモディファイケートされる。とすれ
ば、神戸近郊（「再度山」「六甲村」
「緑ヶ岳」）への住まい（「西洋館」）探
しの顛末を語った稲垣足穂の「煌ける
城」（一九二五・一）は、その内部に穿
たれた空間の質感を露にしたテキスト
として読めるだろう。

前衛芸術と郷土芸術——神戸一
九二〇年代文学の後景——

島村 健司

本報告における領分の大枠は、文学
と美術のかかわりを検討することであ
る。具体的には、たとえば、稲垣足
穂「星を売る店」（一九二三）の冒頭
部で描かれるような前衛芸術を踏まえ
た小説表現の背後に考えられる当時

の神戸の状況について、『大阪朝日新
聞神戸附録』を手がかりに検討する。
一九二〇年代はじめての神戸では、とく
に絵画の分野において前衛芸術の息吹
が感じられはじめる。それが明らかな
広がりを見せたのは、一九二三年に第
八回を迎え、「神戸の帝展」ともされ
た「神戸美術展覧会」であった。「未
来派」や「表現派」といった術語で批
評された作品の数々を掲示したこの
展覧会は開期が延長され、人気を博し
たようすがうかがえる。このような当
時の神戸の動向を前提にしつつ、しか
し、前衛芸術を単に前衛芸術として受
容することとは別に、郷土芸術として
包摂しようとする一面も確認できる。
このような側面を明らかにしてみること
が本報告の中心になる。

支部大会報告 二〇一六年度 春季大会

六月四日(土) 於・花園大学

■大会発表を終えて

金達寿における関西

廣瀬陽一

今回の発表で取り上げた「行基の時代」は、物語内容は難しいものではないが、読解することは決して容易ではない。金達寿の文学活動のみならず、北朝鮮や韓国に対する政治的眼差しや左翼系在日朝鮮人組織との関係、さらに一九七〇年前後から本格化した古代史研究を通じて主張したことまで踏まえなければ、行基ないし「渡来人」を近現代の在日朝鮮人と結びつけるという、致命的な誤読を犯してしまうからである。

ところが、金達寿の知的活動の中で、およそ古代史研究ほど誤解を受けているものもない。朝鮮半島情勢や在日朝鮮人差別などの現実的な諸問題からの逃避、「日本は朝鮮人が作った」式の自民族中心主義的歴史観の表出といった非難は、その代表である。しかし私が『金達寿とその時代』(二〇一六年五月、クレイン)で論じたように、金達寿は古代史研究を通じて、「渡来人」が朝鮮人であると主張したことは一度もない。そもそも彼の古代史研究は、日本人が古代史について書いた文章の集積と言うべきものであり、日本人の誰も語っていない事柄については、積極的に自説を提起して展開させることを努めて抑制した。ま

た彼の「帰化人」概念批判が、歴史教科書の記述を変えるほど大きな社会的影響力を持ったことを考慮すると、そこに極めて政治的な意味合いが込められていたことは明瞭である。それゆえ、私はあらためてここで、彼の古代史研究に対する前記の非難は、彼が引用している日本人の学者や郷土史家などにこそ向けられるべきものであることを指摘しておきたい。彼の説を妄言と笑うのであれば、その前に、他ならぬ日本人が堂々とそのような学説を唱え、日本社会で通用していた事実を驚くべきである。

こうして「行基の時代」は、金達寿が文学活動の中で獲得し、古代史研究を通じて開花させた歴史学的言説への批判的視座、さらに北朝鮮や総連への失望から生じた〈社会主義〉の問い直しという、文学・古代史・国家の三つの領域にまたがる問題系が複雑に絡みあった小説である。発表では、小説の読解を通して、これらの問題系を、

■春季大会印象記

前半

尾添 陽平

〈三韓征伐〉的歴史観に対する彼の知的闘争の変遷という形で整理・考察し、彼の知的活動にあらためて目を向ける意義を提示しようと試みた。今後さらに考察していかなければならない問題は残っているが、この試みが少しでも伝わっていれば幸いである。最後に今回、このような発表の機会を与えてくださった関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

二〇一六年度春季大会では、連続企画「《異^い》なる関西——1920・30年代を中心として——」の第二回「根（ルーツ）を問う」ということで、廣瀬陽一氏と酒井隆史氏の二氏が発表を行った。そして、二氏の発表とも、今大会において主催者側が狙ったものを更に深め、かつ極めて刺激的な発表であったとの印象を受けた。

まず、廣瀬陽一氏「金達寿における関西——〈神功皇后の三韓征伐〉と「行基の時代」は、金達寿が如何にして「絶えず各地域に固有の歴史性を、中央の歴史の一部に回収している」とする」〈三韓征伐〉的歴史観を克服していったのか、その過程を論じつつ、金達寿の文学活動全体を、改めて見直されていった。さて、歴史という

ものは本来、豊饒なる世界である。しかし、歴史が編纂される際、ある構図に回収しようとする力が働いてしまうこともあり、歴史を叙述する際には、歴史を単純化しようとする力に対して、細心の注意を払わなければならない。しかし、歴史の単純化に注意しつつ、歴史を叙述するには一体、どうすれば良いのか。その答えが廣瀬氏の発表の中にあつたように思える。すなわち、〈三韓征伐〉的歴史観を克服し、本来の豊饒なる歴史の世界を回復せようとした「金達寿の知的活動に、あらためて目を向ける」こと、その行為を経た時、我々は歴史を単純化しようとする力に対抗しうる力を獲得するだろう。現状は、歴史の単純化はおろか、歴史を改竄しようとする動きさえ見られる。そして、そんな状況だからこそ、廣瀬氏が発表の最後で述べられた「金達寿の知的活動に、あらためて目を向けるべき必要性」は、より強くなるものと思われる。

突き付けていた。

前半

宮川 康

次に酒井隆史氏は、「川島雄三と織田作之助」（酒井氏は発表当日、川島雄三と織田作之助の順番を入れ替えられた）で、川島雄三は織田作之助を解体しようとしていたのではないか、という、刺激的な仮説を立てられた。確かに、青森出身で、東京に出て映画監督になって、大阪を舞台とした映画を撮った、いわば「根」のない川島だからこそ、大阪という風土に「根」 گذاした「織田作之助」は解体できたと言え、オダサク解体は、どこかに「根」付いてしまった表現者なら、決して成しえなかった作業であったとも言える。そして、酒井氏の提示された、川島雄三と織田作之助の関係からは、「根（ルーツ）」とは何か、「根」にからみとられるとは、「根」におぼれるとは一体、どういうことなのか、そして、「根」に抗うには、「根」を解体するためには、表現者は一体、どのような方法を探りうるのか……、そんな「根」源的な問いを、我々聞くものに

廣瀬陽一氏の発表「金達寿における関西」について。レジュメの記述を解説して行間を補う発表は、わかりやすく聞けた。氏は、金の作家としての側面より、歴史家としての側面をむしろ強調され、最後の小説作品となった『行基の時代』について論じられた。渡来人としての行基が現代の在日コリアンの根（ルーツ）ではなく、むしろ日本人の根であり、しかも行基自身は、ヤマト中央政権との微妙な関係性の中で生きた人物であるとされ、その重層性を金が、日本と朝鮮との「もう一つの歴史への眼差し」で描こうとしたと語られた。行基の社会事業へのとりくみが、金自身の《社会主義》の再検討との関係で読み解かれていることについて、さらに説明がほしいところ

ではあった。

酒井隆史氏の発表「川島雄三と織田作之助」について。発表は、織田にまつわる川島監督作品として「還つて来た男」（昭一九）「わが町」（昭三二）「貸間あり」（昭三四）を取り上げられた。それぞれの映画の場面を紹介されながら織田作品との関わりのありようとその意味を論じられ、織田の川島に対する影響が従来語られてきた以上に根深いものであり、「貸間あり」に向かう過程が、その影響を解体しながらも止揚しようとするものであったと結論づけられた。幾度か織田を論じてきた私としても、その結論に異存はなかつた。氏は、「貸間あり」において、井伏鱒二の原作の舞台設定を東京から大阪の織田の故郷である夕陽丘に置き換えた点、端役の人物名が織田の代表作「蜩」の主人公・登勢と同じになっている点、主人公がラストシーン近く「別府音頭」を唄う点に、織田への

オマージュを見て取られている。もちろんそれだけではなく、むしろ錯雑する人間関係を置くにふさわしいトポスとしての大阪・織田の世界を描くことで、織田の乗り越えを図っているのだという指摘は、肯ける。ただ、具体的なオマージュという点でいえば、上記の三点の他には、冒頭の天牛書店の場面ぐらいいしか見あたらず、むしろ主人公造形の織田への近親性は、川島の「幕末太陽傳」（昭三三）の、結核を患いながらも機智を働かせて物語を喜劇に編み上げていく「居残り佐平次」の姿のほうにより色濃く表れていると思われるのだが。主人公が画面中央に消え去っていく終幕が「貸間あり」と共通していることもあり、この映画への言及もほしいところであった。ともあれ、織田と川島の関係は、二人が書簡でやりとりした「日本軽佻派」の内実の検討も含め、さらに取り組まねばならぬ課題であることを、氏は提示された。

お二方の発表内容はともに、すでに著書として公になっているものだが、本稿を書いている時点で私はそれらに目を通すことができておらず、的外れの印象になっているかもしれない。そうであれば御容赦願いたい。

後半

秋吉 大輔

人は生きる上で様々なことを自問自答する。一度出した答えもまた考え直され、再度自問を繰り返す。人はその循環の中で生を紡いでゆく。その「自問」と「自答」の間にある間隙——語り得ぬ、待つ、考える時間——、そこに「文学」は拠って立つと黒川創氏は述べる。自問と自答の言葉を架橋する試みが文学なのだ。しかし、それだけではない。その間隙において当事者は、ただ無我夢中である。そこでは、語り得る一人称や三人称、主語が消え、述語だけの状態となる。そこに文

学は内在し、文学が発生する。では、文学とはどのような言語形式なのか。黒川氏は、「共通の人間の真実」（金達寿『わがアリランの歌』）を描き出す形式が文学であるとする。それは出自や階級など「根」が全く違う志賀直哉を、正面から見据える金達寿のような姿勢によって可能となる。つまり、学問的に分類・対象化されたカテゴリーを前提に性急に語るのではなく、語り得ぬ時間において、日常生活の内在から粘り強く思考することが必要なのだ。そこに文学の試みがある。

京都育ちの黒川氏にとって、「被差別部落」や「在日朝鮮人」といった人々は、そのような言葉で対象化される以前の、日常の網の目の風景としてあった。小説『京都』では、その記憶の断片を、同じ風景を共有した町の当事者として書くことを試みたが、実際に風景の中の存在を肉付けして書くことは、語り得ぬ長い時間（調査・自問自答）を通過することが必要であった

という。講演の最後に、対話の継承という学問の責任について語られた。それは、言語化されるまでの語り得ぬ対話の過程（学問史）そのものを継承し、更なる対話へと開いていくことである。責任＝問題回避のために言葉を強迫的に自己規制していく現状において、学問のあるべき一つの姿が提示されたように思う。

全体討議では、登壇者の共通点が明確になったように感じた。三韓征伐の歴史観によって階層中心化される空間を地域研究によって穿つ金達寿（廣瀬氏）と、運動や情動を空間性によって捉える川島雄三（酒井氏）、対象化以前の風景を空間の当事者として描く黒川創氏。そこでは、対象化主体化以前の様々な運動や情動、群れが擦過する都市空間として関西が立ち現れる。そのような空間性を流動的に捉える試みは、金達寿の粘り強い姿勢（黒川氏）や探求を媒介としたネットワーク構築（廣瀬氏）、「軽くてシリアス」と

いった軽佻派のスタンス（酒井氏）によって可能となるのであろう。会場からは、ポストコロナルな関西の可能性という質問も出た。それも関西を東アジアの資本システムの中で移動する人々が擦過する空間として捉えることで見えてくる視点だろう。文学によって空間の流動性をいかに捉えるのか。様々な《異》なる関西の可能性を感じた大会であった。

「語り得ぬこと」と「語るべきこと」（後半）

黒田 大河

「自問自答ということがある。その間をつなぐ点線のように、考える時間というものがある」。黒川さんは静かに語り始めた。自作『京都』について語る時、ウィトゲンシュタインの言葉に依りながら「いつか語るべき時が来るまでの沈黙に堪えるしかない」と口ごもりつつ。生まれ育った京都という町

に引かれた見えない線と向き合うことを決意した、表現者の思いに触れ得たご講演だった。

概念化された言葉、例えば「在日朝鮮人」「被差別部落」といった言葉に對して、幼い頃の身体を通して感じた風景に、特別な地区の点線が引かれていたわけではない。「よその人」「こちら」といった日常の中の見えない線によって語られるもの、他者と自分との関係の中で定まるような言葉を小説に書きたい。黒川さんのそんな思いは、『国境』や『暗殺者たち』といったアクトチュアルなテーマを抱いた作品の読者であった自分に、黒川さんの持つ当事者性の重みに気づかせてくれた。『異』なる関西という主題で、関西の表象をとらえ直すこの特集が、それぞれの地域の持つ《根》に迫ることとなった。内なる他者性の問題はポストコロナルな問いであり、ナショナルなものが台頭する現在にどのような向き合えるのか。こんな研究者としての

概念的な問いかけに対して、〈根〉の問題は自ら掘り下げるしかないことだ、と厳しくおっしゃった一言が、わたしたちそれぞれの仕事を問い直させる。

『国境』の「あとがき」に次のような言葉があったのを思い出す。「砂まじりの事実には、砂まじりの記憶をあてがいながら、折り重なる層のなかをさかのぼり、すりあわせ、行きあたる事実に埋もれている記憶をさらに開示していくこと」。埋もれた事実を掘り起こすことは、痛みを伴う作業であって、「ポストコロナアルな問い」などという大義名分によって免罪されるものではないこと、そして研究主体の当事者性という厳しい自問自答が、常に必要であるということ、講演を通じて改めてこの言葉の重みに気づかされた。

ディスカッションも実り多いものであったが、それよりも廣瀬陽一さんの『金達寿とその時代』、酒井隆史さんの『通天閣』など魅力的な宿題をいた

だいたことも収穫である。京都の大阪人であるわたしにとって、日劇シネマや飛田新地という固有名に纏わる世界は近くて遠い場所であった。故郷喪失者であるが故に見出した世界、酒井さんが川島雄三に託した視角は、当事者性のくびきを解き放つ可能態でもあった。

日高 佳紀 著

『谷崎潤一郎のディスコース』

近代読者への接近』

佐藤 未央子

常に先端を行き自らを改革し続けたからこそ、谷崎は長きにわたり〈読者〉を獲得してきたとする著者の指摘は重要だろう。谷崎が企図した「読者への接近」の方法を考察するにあたり設定されたのが「ディスコース」概念である。バンヴェニスト、フーコー、ジュネットらの定義を踏まえた上で、その意味を読書行為の「現場」においてイメージする必要性を著者は説く。そこで表現構造に加え、メディア、制度や歴史といった諸現象とテクストの関わりから、読者に対するディスコースの力学を捉えるのが本書の方法である。

第Ⅰ部「メディアを横断するエクリチュール」では「お艶殺し」「武州公秘話」「細雪」を取り上げ、装丁や発

表媒体等の外的要素とテクストの連関性及び読者との距離を解き明かす。第Ⅱ部「コンテクストとしての消費文化」は、貨幣経済の価値体系や教育、社会制度の同時代状況と文学言説が交差するテクストとして「小さな王国」「痴人の愛」の批評性を検証。国家が孕む構造的矛盾や大正趣味教育の制度性、特権性を剔抉した。第Ⅲ部「歴史へのパースペクティブ」では「乱菊物語」「盲目物語」「聞書抄」を中心に、大衆読者層に対する戦略と〈歴史〉叙述の方法を焦点化。主に読書行為の動的な現場性、歴史的コンテクストとそこから逸脱する作用を論じた。昭和一〇年代の全体主義的風潮に対し、歴史や解釈における意味の複数性を担保する谷崎の傾向に、逆説的な政治的姿

勢を看取する点は興味深い。第Ⅳ部「翻訳行為としての読むこと」ではテクストと古典の関わりを考究。「蘆刈」については、「お遊」表象に象徴される不在の対象を〈語る・聴く〉時点に招来するプレテクストと「父」「男」の回想が、〈歴史〉を物語る営為とパラレルであると卓抜に分析した。続いて『源氏物語』をめぐる言説、口語訳の表現を検討し、文体を変革していく谷崎の実践を跡付けた。

著者の議論は、読者の参画が不可欠であるテクスト生成のあり方について再考を迫る。その実証として、戦略的に読者と向き合った谷崎の事績が選ばれたことは有効だろう。読者概念の更なる検証、谷崎の他の歴史や古典趣味小説の論究が俟たれる。谷崎の営為を理解するためのみならず、方法論としても示唆に富む成果である。

(二〇一五年一〇月一五日 双文社
出版 三〇五頁 三三〇〇円＋税)

禧美 智章 著

『アニメーションの想像力』

——文字テキスト／映像テキストの想像力の往還——

山中 智省

文学を含む小説作品の映像化は、メディアミックスが常態化した昨今、もはや珍しいものではない。かつて角川映画が提示した「読んでから見ると、見てから読むか」というキャッチコピーはあまりに有名だが、現在はこのような言葉を意識することなく、我々はメディアミックスの環境下で文字（小説）と映像を横断しながら個々の作品に接している。このとき、映像テキストは文字テキストの従属物ではなく、メディアや表現の違いを生かした物語の「変奏」として理解されるべきものだろう。そうであるならば、映像テキストから「変奏」の内容を把握することはもちろん、文字テキストと映像テキストとの連関性を捉えていくことが求められる。その実践と言える本

書は、主に日本のアニメーションを対象に戦前から現代に至る視覚文化を概観しつつ、物語をめぐる「想像力」の源泉となった文学との相互的關係に迫る意欲的な研究書である。

本書は、文学研究と映像研究の方法によってアニメーション作品を分析し、アニメーションを「読む」ことを試みた点に大きな特徴がある。この試みは、アニメーションのプロットやストーリーに注目していく従来の静的なアプローチと異なり、映像表現を踏まえた動的な研究へと我々を誘っている。また本書で展開される映像テキストの分析は、文字テキストが持つ「視覚性」といった新しい要素に加え、文字テキストと映像テキストがはらむ「想像力」を浮き彫りにする。文字テ

クストである文学の映像化には、読者でもある制作者の「想像力」が介在してくる。では文学から映像作品に至るまで、読者／制作者／観客の「想像力」はどう伝播するのか。この点について本書は、視覚芸術化の実績を持つ泉鏡花「天守物語」や宮沢賢治「銀河鉄道之夜」の分析からその様相に迫っていく。さらに第六章から焦点化される押井守のアニメーション作品の分析では、特徴的な技法や表現が観客にある種の混乱をもたらし、日常で「思考しえないもの」を思考させる「ような「想像力」の伝播が見られることを明らかにしている。

文学と映像の関係をめぐる研究は、文学研究における新興の分野として更なる発展が望まれている。こうしたなか上梓された本書は、当該分野にとつて先駆となる研究成果であり、今後参照されるべき必携書の一冊と言える。

（二〇一五年一〇月三十一日 風間書房 二七八頁 七〇〇〇円＋税）

山内 祥史 著

『太宰治の『晩年』——成立と出版』

山田 佳奈

『晩年』は、昭和十一年六月に刊行された太宰治の第一短篇集である。太宰はこの短篇集について、『晩年』に就いて「という随想の中で次のように述べている。

私はこの短篇集一冊のために、十箇年を棒に振った。まる十箇年、市民と同じさはやかな朝めしを食はなかつた。(中略) 私はこの本一冊を創るためにのみ生れた。けふよりのちの私は全くの死骸である。私は余生を送つて行く。

太宰にとって思い入れの深い『晩年』は、今なお新たな読者を獲得し続けている。

そんな『晩年』の成立と出版について知ることでできる書物が本書である。著者は、太宰研究のパイオニアであり、第一線で長年活躍されている山

内祥史氏。各事項の検証はすべて、膨大な書物や山内氏宛に届いた関係者の書簡から推定されており、その実証のプロセスを学べるのも本書の魅力の一つである。項目を次に示す。

I 『晩年』収録作品の初出、II 『晩年』の成立、III 『晩年』の刊行にいたる経緯、IV 『晩年』の発刊、V 『晩年』献呈の辞、VI 『晩年』の広告、VII 『晩年』出版記念会、VIII 再版以降の『晩年』

今後、本書が『晩年』研究の必読書となることは間違いない。

また本書は、研究者でなくとも、太宰ファンにも興味深い研究書である。例えば、檀一雄が『晩年』の上梓のために奔走したこと(III)や、山岸外史が『晩年』の広告をひねり出すために苦勞した(Ⅵ)といった友情エピソード、そして、太宰が『晩年』献呈の辞に苦心している(V)様があることが、出版記念会での「出席者諸氏によるテエブル・スピーチ」が沈んだ雰囲気の中行われ、太宰本人のスピーチが、パビナール切れのため悲惨であった(VII)という裏話も、本書で知ることができる。これら『晩年』にまつわる人間太宰治を、一冊で垣間見ることのできる本はそうそうない。

さらに、参考資料として収録された『晩年』作品の手引きは、研究をはじめようとする大学生の道標ともなるだろう。その冒頭で山内氏は次のように述べている。「読者のひとりひとりが、ひとつひとつの言葉を通して、各人の太宰治の作品を豊かに創っていくことこそ、肝要ではないかと思う」。整えられた資料を前に、私たち読者が太宰作品の読みをいかに切り拓いていくか。新時代の研究の飛躍が求められる。

(二〇一五年一月一日 秀明出版会 二六五頁 二五〇円＋税)

山内 祥史 著

『若き日の日野啓三——昭和二十年代の文業』

藤原 崇雅

日野啓三といえば昭和三十年代に出版された評論集や、芥川賞を受けることになった私小説風の作品を思い浮かべる人が多いかもしれない。しかしその執筆活動は、昭和二十年代よりすではじまっていた。本書では日野文学の初期のありようが、丹念な資料発掘とその整理を通じて詳らかにされる。

全七章構成をとる本書では、年代順に日野の文業が整理される。まず、Ⅰ「向稜時報」紙上の日野啓三^Ⅱでは、旧制第一高等学校寄宿舎の時報へ、投稿を続けていた日野の青春時代が描かれる。Ⅱ「現代文学」誌上の日野啓三^Ⅲでは、大岡信らと発刊した同人誌の性質が検討される。Ⅲ「近代文学」誌上の日野啓三——昭和二十六年まで

——では、日野と荒正人との関わりが検討される。

Ⅳ「日野啓三・昭和二十七年の文業」では、新人批評家だった日野が、思想の鍵概念である「虚点」を具体化する経過が論じられる。Ⅴ「日野啓三・昭和二十九年の文業」では、奥野健男や清岡卓行、村松剛らと創刊した雑誌「現代評論」での文業が追われる。Ⅵ「日野啓三の著書」とⅦ「日野啓三創作一覧稿」は資料編となっており、まとまって読むことの難しい日野文学の全体像の把握に重宝である。

以上の論述を支えるのは、資料現物と向き合う真摯な手法である。雑誌を参照し、記事に署名がない場合であっても、編集の状況や書かれた内容から日野によるものかどうかの特定がなさ

れる。この手法は、長年に渡って日野の文章に親しまれてきた氏であるからこそ、採ることの可能なものだろう。

さらに、豊富な成果に加え書評子が興味を引かれたのは、ときおり挿入される氏ご自身に対する言及であった。たとえばⅢでは、日野の「野間宏論」が紹介された後で、氏が過去に「『暗い絵』論」を書かれたことに触れられる。その上で氏は、「日野啓三の世代は、野間宏の世代と「ぼく達」の世代との中間に位置すると、痛切に感じた」と述べられる。つまり読者は、若き日の日野だけでなく、若き日の氏についても知ることとなる。本書が単なる研究書を超えた高級な読後感を残すのは、作家に対する氏の想いが感じられるからであろう。

これからの日野研究にとって重要なだけでなく、戦後文学に関心のある者全員が手にとるべき好著である。

(二〇一六年一月一日 和泉書院

二二三頁 三三〇〇円＋税)

紹介

尾崎翠フォーラム実行委員会編

『尾崎翠を読む 講演編Ⅰ』

『尾崎翠を読む 講演編Ⅱ』

『尾崎翠を読む 新発見資料・親族寄稿・論文編』

岡村 知子

二〇〇一年から二〇一五年にかけて、一五回にわたり開催された「尾崎翠フォーラム」の成果の結実として、本書は刊行された。尾崎翠フォーラム実行委員代表・土井淑平氏が、本書には「他では読めない卓抜な考察が少なくない」（『講演編Ⅰ』あとがき）と述べられる通り、翠の映画観や、翠作品映画化の意義、金子みすゞ、宮沢賢治、ヴァージニア・ウルフ、エドガー・アラン・ポーといった文学者と翠との影響・共振関係等、問題提起的な論点が並ぶ。全集未収録の資料も添えられ、今後ますます深化が期待される尾崎翠研究の里程碑となること間違いない。

（二〇一六年一月二七日 今井出版 一六九頁 一八〇〇円＋税）

（二〇一六年二月一四日 今井出版 一八四頁 一八〇〇円＋税）

（二〇一六年三月一〇日 今井出版 二九四頁 二〇〇〇円＋税）

紹介

倉敷市編著

『倉敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 文化人篇』

須田 千里

倉敷市は、同市出身の薄田泣菫の遺族から約一七〇〇点の資料を寄贈され、「薄田泣菫文庫」と名付けて管理し、プロジェクトチームによる調査研究を進めてきた。本『文化人篇』は、『作家篇』『詩歌人篇』に続き、演劇・美術・音楽・華道・出版など文学を巡る周辺文化圏から二〇四点を収録。

発信者は、赤松麟作・内田魯庵・金尾種次郎・鹿子木孟郎・鍋木清方・久保田万太郎・厨川白村・後藤宙外・島村抱月・鈴木鼓村・高須梅溪・高安月郊・竹内栖鳳・土田麦僊・坪内逍遙・徳富蘇峰・内藤湖南・中澤弘光・西川一草亭・平野履道・正宗得三郎・松井須磨子・満谷国四郎・森田恒友・安成貞雄・柳田国男。補遺として志賀直哉・島崎藤村。巻頭に「薄田泣菫宛書簡集雑談」（浦西和彦、巻末に「座談会 倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡収集・調査・公開」（荒井真理亜・浦西和彦・掛野剛史・片山宏行・庄司達也・西山康一・三宅昭三）、「正誤表」、「倉敷市蔵薄田泣菫文庫書簡目録」、「薄田泣菫発信書簡目録」を付す。

（二〇一六年三月二五日 八木書店 二二一頁＋二六頁 九八〇〇円＋税）

事務局 便り

○献本のお願

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

○関西支部二〇一六年度役員

浅子逸男（支部長） 山本欣司（運営委員長） 天野知幸 泉谷瞬 岡村知子 加藤邦彦 木谷真紀子
斎藤理生 坂堅太 重松恵美 須田千里 関肇 高橋幸平 瀧本和成 田口律男 田中裕也 戸塚麻子
中谷いずみ 西山康一 福岡弘彬 ホルカ・イリナ 増田周子 三品理絵 山田哲久 山本昭宏 和田崇

○日本近代文学会関西支部事務局

〒663―8558 兵庫県西宮市池開町6―46 武庫川女子大学文学部 山本欣司研究室内

二〇一七年度 関西支部春季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一七年度春季大会における自由研究発表を募集いたします。
支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

日時・会場 二〇一七年六月三日（土） 会場・同志社大学 今出川キャンパス

※詳細は決定次第、関西支部HPでお知らせいたします。

募集人数 二名

応募締切 二〇一七年一月三一日（火） 必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の結論の書かれた要旨を封書でお送りください。

必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

発表時間は三〇分程度です。

採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町6-46 武庫川女子大学文学部 山本欣司研究室内

日本近代文学会関西支部事務局